

深夜の不毛帯開拓のパイオニア 『11PM』誕生秘話

元制作局チーフディレクター 横田 岳夫(NTV)



11PMの顔になった大橋巨泉、朝丘雪路のコンビ

みんなの
民放史

題字
中川 順

昭和40年当時、夜11時に皆さんは何をしていただろうか？夕食後、風呂に入ってテレビを見る。朝早い人はもう寝ているだろう。

その頃のテレビは、一部カラーの実験番組はあったが、殆どモノクロで、朝8時前後から夜11時頃までのおよそ15時間放送で、そこには9時間あまりもの「深夜の不毛帯」が存在した。

何しろタクシীর初乗りが90円。国鉄(JR)になったのは昭和62年の初乗りが10円。夜半に仕事を終えて何か食べようとしても、ごく限られた店しかなかった時代である。

一日はどんなに買い手が多くても24時間しか売れない。それを9時間も閉店するのは誠にもったいない。最初は売れなくても何とか売る努力をしようと考えたのが、民放最古の日本テレビではなかっただろうか。

東京オリンピックも無事終わり、世の中は経済成長へ走り出す頃だった。街には観音開きのクラウン、縦四つ目のセドリック、ヒルマン、オースティン、ルノー2CVが走り、ワーゲンのビートル1200が憧れだった。

32 年に入社して、希望通り音楽班(まだ課でも部でもない)に入社して、音楽番組を週 6 本も抱えて奮闘していた僕に、運動部長後藤達彦(タツチャン)と、8 年間師と仰いできた音楽部井原高忠(ターサマ)の二人から誘いを受けたのは、40 年 4 月のある日だった。

「月曜から金曜の帯で、1 時間のワイドを生でやる。月水金は日本テレビ(N)、火木は大阪読売テレビ(Y)で制作する。スタッフを社内から集めるので、芸能局代表で参加しないか? 但し、ワイドで消えるか、3 年もつかわからないけど」とのこと。

折しもテレビの音楽番組が、視聴率と予算に縛られて自分が作りたいものが作れないことに限界を感じていた僕は、この新発想に思いついて飛び込んだ。(これが 21 年も続くとは夢にも思わず)「もしつづけたら、音楽番組に戻ればいいさ」という甘えがあったのは事実だ。

深夜の不毛帯を少しでも商売にしようというこの発想は、当然編成部と営業部が議論を重ねた末に、当時最も進歩的で、未来の番組像を抱いていた実力派の、後藤、

井原の両氏に白羽の矢が立ったのだろう。

スタッフ、方向、出演者決定

スタートは 11 月 8 日と決まり、早速スタッフの編成が始まった。

番組の基本コンセプトが「ニュース主体ワイド版」とのことで、名目は報道局制作となったが、60 分の生番組ならスタジオに慣れている芸能局組に負担がかかるのを目に見えていた。結局、報道 2、社教 2、アナウンス 1、映画部 1、ドラマ 2、音楽 2 の混成部隊が出来上がり、内容と出演者の検討が始まった。

番組名は分かりやすく『11PM』でいいじゃないかとの意見がすんなり決まった。

基本的姿勢は、月曜は政治、社会ネタ。水曜は三面記事。金曜は週末を控えてレジャー主体となった。対象視聴者層は 20 代から 50 代の男性とし、女性はまだ意識していなかった。

僕はかねてから密かに、雑誌でいえば当時の『週刊平凡パンチ』風の男向けの遊び番組を週末にやりたいとの想いを持っていたので、チャンス到来とばかりに、金

曜を担当し毎週一人で作る旨願ひ出た。これは「併せて月曜、水曜の内容もアドバイスすること」の条件付きながら、二人のプロデュースにも正式に認められた。

一番困ったのは新しいタイプのワイドショウの司会者として、60 分を生でこなせる人探しだった。3 ヶ月で消えるかもしれない番組に既成の人物は使えない。結局、全く新しい形式の番組なんだから、司会も素人で始めてみようということになり、メインをジャーナリストの山崎英祐さん。アシスタントには 30 名余のオーディションの結果、若くて可愛い高原良子さん。ニュース解説に読売新聞の小林庄一さんが決まった。大阪は藤本義一、安藤孝子、飯干晃一の異色の組み合わせと決まり、また、タイトルバックや CM 前の 5 秒間の差し替え Q カットには、目の保



初代キャスター山崎英祐



大阪の司会・藤本義一、安藤孝子

営業部の新商品開発への期待は大きく、営業が将来の海外取材を見越していち早く日本航空とのパートナーをまとめてくれたのが、後々大いに役立つことになる。このパートナー契約は、毎日日航の30秒スポットを入れる替わりに、当時のノーマルエコノミー料金年間2000万円分の無記名チケットを出すというものだった。

コク、ニューデリー、テヘラン、カイロ、ローマと寄港して約29時間を要したと記憶している。

ゴッタ煮の内容でスタート

さて、てんやわんやの検討の末、その日のニュース、最近の話題の裏話、ファッション、映画紹介、5〜6分のミニドラマ、徳川夢声さんの講談調『007』等が決まってきた。

およそ異質なもののゴッタ煮に見えるが、ゴッタ煮の中に新しい

養にとターサマお得意のファッションの分野から、モデルクラブや公募の素人の大オーディションを行い、ジューン・アダムス以下7人のカヴァーガールを決め、バニール風の衣装も完成した。

海外取材を見越し日航と提携

新番組の骨組みが次第に固まってゆく中で、僕の心中には「金曜は自分に成算があるが、月曜と水曜は、今までニュース原稿を書いたり、短い教養番組を作っていたスタッフが、深夜に起きて見てもらえる番組を作れるのか」という不安が芽生えていた(家庭用のVTRはまだ普及していなかった)。

これをNとYが3対2で分け、僕らは年間1200万円分を海外取材に使える訳。当時まだ海外旅行は一般的ではなく、これからの経済成長期に海外旅行への誘いを拡大したい日航と、我々の思惑が一致したのだろう。といっても、当時アメリカへの直行便はなく、ハワイで給油。ヨーロッパ線は、DC8-55という機種で、定員は130名だが、機体の前およそ3分の1を貨物室にしているの、客室は約80席。そして、ソ連上空や、アラスカ経由の北回りがまだ無く、南回りが週3便だけ。東京からパリへ行くのに、台北、香港、バン



勢揃いしたカヴァー・ガール

深夜番組の行くべき道を探るのが狙いだからこれでよいのだ。事実この後は、月水金が夫々の道筋を決めて発展してゆくことになる。僕はこの番組を、勤め人が仕事から帰宅して夕飯をとり、風呂上がりにはパンツ一枚で寝転がって、ビールでも飲みながら見たくなる、そんな内容をイメージしていた。

そして、遂にやってきた40年11月8日月曜日。技術の指令塔のスイッチャーが毎週音楽番組で呼吸ピッタリの野口博さんだったのもラッキーだったし、フロアにはこの種の番組では最重要ポストであるフロマネに僕と一緒に音楽部から参加していた百戦錬磨の仁科俊介君がいてくれたので、たいしたボロを出さずに終了。しかしエンディングが流れ、ON AIRのランプが消えると同時にドツと疲れが出た。

第一回を終わって痛切に感じたのは、この番組にはスタジオに慣れている芸能局組が、少なくともあと5、6名は必要との思いだった。

なお、『11PM』のテーマは、ターサマ一流の凝り性で、当時一流の音楽家、三保敬太郎氏に作曲し

てもらったもの。当時、ジャズスキャットを歌えるプロのグループはなく、クラシックの東京混成合唱団の女性コーラスをリズムに乗って歌わせるのに丸一日かかり、大変な苦労だった。後に大ヒットとなるこのテーマは、「サバダサバダサバダバ」であり、殆どの人がいう「サバザバサバサバ」は間違いなので、念の為。

大橋巨泉登場

一回目を終わって、自分の番組ながらつまらないと感じた僕は、事前に見てくれるよう頼んでおい



巨泉と打ち合わせをする筆者

た大橋巨泉に忌憚らない意見を求めた。彼は僕より六か月早い生まれの同年齢ながら、当時既に音楽評論、訳詞、レコード解説等の分野でマルチな才能を発揮。テレビ界の先輩として色々教えてもらったが、初対面から意気投合したワセダ对ケイオーの親友だった。

「全体に深夜にしては固いよ。少なくとも金曜はもつと遊び中心でいいんじゃないの」。同感だった僕は二週目から、巨泉と相談した上で6分間の『巨泉なんでもコーナー』を作った。文字通りなんでも遊びネタを一つ取り上げ、その道の達人を招いて秘伝を聞くのだが、達人必ずしも話が得意とは限らずむしろ逆が多かった。そこで「いっそのこと、巨泉が自分でやっちゃえば」との僕の一言が、テレビタレント巨泉の第一歩となり、後に正司会者への登用が、一世を風靡した「野球は巨人、司会は巨泉」の名セリフにつながってゆく。

『何でもコーナー』の第一弾は、5番アイアンを持った巨泉の悩みにプロがアドバイスをするなど、アマチュアゴルフアー巨泉のトーク。これがハンデ10、20台の共



月水司会の小島正雄と高原良子

感を呼んだらしく好評を博し、金曜イレブンの行くべき道がかすかに見えた気がした。

このあとこの『何でもコーナー』は、麻雀、ボウリング、釣り等は、後の金曜イレブンの核となる要素に拡がってゆく。

番組継続へ大幅テコ入れ

走りだした『11PM』は、回を追って月水金各曜日の色分けも徐々に固まりだし、駄目なものも切り捨て、新しいアイデアを考

え、漸く番組らしくなってきた。

僕は一人で金曜日の中身を考え、60分を埋めるのに必死だった上、番組作りに不慣れな報道、教養組のために、月水の制作会議にも必ず参加していたので、めちゃくちゃ多忙だった。

そして番組内容が充実してくると、かなりのトチリも大目に見ていた素人司会陣の負担が大きくなり、より繁雑になる内容を捌き切れなくなってきた。

41年3月に入ると、営業的にメドが立ったとのことで4月以降も続行が決まり、制作スタッフも司会陣も刷新が不可欠になった。大阪の二人は、素人ながら関西人独特の飾り抜きのキャラが受けたように、続投となったが、東京の3人は求めるものが酷だったようで、3月一杯で降板していただいた。

スタッフも半分以上を入れ替えて、芸能局から、その時点で番組を持っていなが、作る能力がある人を何人か引き抜いた。

同時に番組は報道局制作から芸能局制作に変わり、出向の形だった芸能組が本隊となり、更に充実した番組作りが始まった。僕はこの大改革が『11PM』の本当のス

タートだと感じていた。

この改革時、最大の問題は、ますます複雑化するであろう60分の生番組をソツなく捌ける後任司会者の人選だった。スタッフ間で議論を重ねた上での結論は、当時、音楽評論家で、コンサートの司会もこなす小島正雄氏だった。出演要請への返事は「おおいに興味があるので引き受けるが、週三日はきついので月曜、水曜だけなら」とのこと、楽に即決となった。

大橋巨泉で「金曜イレブン」

残るは僕が担当する金曜日を誰にするかだ。金曜の今後の内容に小島氏は合わないと思っていたが、「じゃあ誰？」となるとこれと思う人がいない。但し僕の意中では、金曜のすべてを託すのは最終的に大橋巨泉しかないとの思いが大きかった。彼は初期の『何でもコーナー』で様々な分野をこなし、これを買われて月曜水曜にも今で言うレポーターの原形みたいなものを無難にこなしていた。何よりも僕が買ったのは、抜群の記憶力、雑学的知識の広さ、負けず嫌い、そしてしゃべりの流暢さだった。世の人は「巨泉はアド

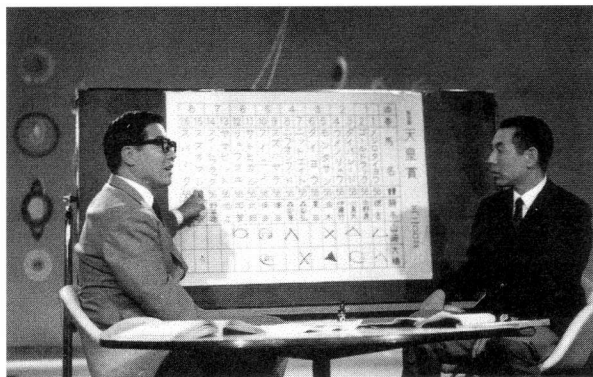
リブがうまい」というが、アドリブは強力な記憶力に基づくもので、普段「あ、これ面白いな」と思ったことを頭にインプットし、適材適所でそれを取り出すのであって、彼はこの点で非常に優れていた。

しかし、制作会議で「大橋巨泉を金曜の司会に」という僕の提案は、予想通り各方面から猛烈な反対を受けた。曰く「軽薄だ。生意気。実績がない。ルックスが…」等々とても通りそうもなかった。

僕は社内の個人々々の説得に転じて、「将来の金曜日をこなせる才能は巨泉以外になし」を旗印に説いて廻り、特に局長クラスには「首を賭けてでも起用したいので、暫く見守ってほしい」と訴えた。結局、強引に押し切った形で「巨泉の金曜」が決まった。

後に巨泉が才能を発揮して金曜の顔になり、他局でもレギュラーを持つようになると、「巨泉は俺が起用を薦めた」と称する人が続出して困った。その殆どは猛反対した人達だった。ざまあみろだ！

「金曜イレブン」が視聴率面、スポットCMの売れ行き面で大発展したのは、巨泉の才能もさるこ



天皇賞予想の競馬コーナー

とながら、第1回にゲスト出演した朝丘雪路さんとの、初回とは思えぬやりとりの軽妙さだった。

僕は8年間、音楽番組での付き合いの中で時折ふと見せる彼女の天然ボケの一面を知って、得難いキャラと思っていた。この勘は的中し、巨泉の突込みと朝丘さんのカマトトボケが絶妙に噛み合い、金曜イレブンの礎が確立した。

それまでの美人歌手美人女優の殻を破って、新しいキャラに挑戦してくれた朝丘さんの勇氣に拍手

を贈るとともに感謝したい。
また、僕は巨泉と金曜の将来を徹底的に議論した、その結果、今までテレビが取り上げなかった麻雀、競馬、ゴルフ、釣り等のスポーツ&ギャンブルも深夜なら許されるだろうという点で一致した。

僕はこれに近い内容を、スタート当時は月曜でやっていたが、内容的に週末を控えた金曜の方がよからうとなり、僕自身も週3回のダイレクティングが、金曜1本に集中出来ることになり、益々テンションが上がっていった。

営業面も成功、番組軌道に

この頃は高度経済成長の初期だったし、やがて週休2日制の普及も追い風となつて『11PM』は各曜日とも順調に力をつけていった。

営業面でも売れ行きは加速度的に上昇し、後には15秒のスポットを入れるのに2〜6ヶ月待ちなんという時代もやってくる(このキヤンセル待ち金は金曜が一番多かったそう)。何しろ当時Dタイムだったのが、後にゴールデンに次ぐ特Bになった位。

42年10月からはカラー番組になり、順調に軌道に乗った『11PM』

だったが、43年の新年早々に大事件が起こる。

何と月曜水曜のホスト振りが好評だった小島正雄さんが、54歳の若さで急逝されたのだ。

とりあえず3曜日とも巨泉が大奮闘して穴を埋め、ひと月後には水曜のホストが三木鮎郎さんになり、月曜は巨泉が金曜路線以外にも意欲を示したので、政治、社会ネタでやることになった。

金曜は内容の充実とともにロケ取材が多くなったが、初期はネット局が少ないこともあって番組の知名度が低く、「じゅういちびいえむって何やの？」などと言われてガツクリ来たものだった。しかし42年後半位からは、空港などで見知らぬ人から握手を求められるようになった。

またネット局が増えるにつれ、スポーツ番組であるが故にスポンサーの制約を受けず、各業界の有力メーカーとのタイアップも自由だったので、内容の充実に大いに役立った。

この頃、大阪は藤本、安藤コンビが好調だったし、東京の月曜、水曜も新しく加わった、制作意欲にあふれた若いディレクターが競

い合って、夫々の曜日の路線を確立して行く。

ただ僕らスタッフを悩ませたのは、放送終了後の視聴者からの電話だった。好意的な意見30%、文句が70%だろうか。時間が経たずに大半は酒気帯びで、際どい内容の日はスタッフが手分けしても対応が終わるのが午前2時、3時も珍しくなかった。世の中どんな物でも反対意見はあるから一々気にしなかったが、あくまで「はいいごもつとも」で早く会話を終わらせるのが皆上手になった。

ちなみに、放送時間だが、番組名の割には、11時開始の期間は2年弱と意外に短く、11時15分から12時20分の65分間の期間がもつとも長かった。

青春を捧げた番組

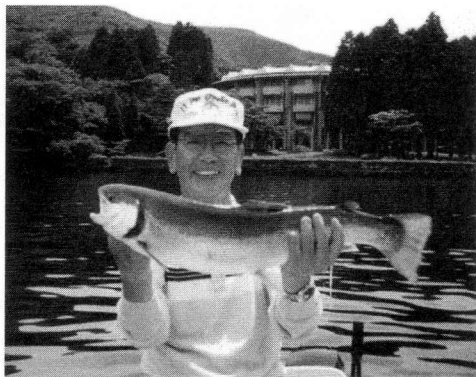
こうして40年前の開始当時を振り返ると、僕自身が30歳から50歳までの21年間、自分の分身の如く番組を愛し、作り続け、自分の青春を捧げた『11PM』への愛着が改めて甦って来る。

40年11月8日から60年9月28日の最終回まで21年間、スタッフとして一週も欠かさず在籍したのは

僕一人だけである。

そしてこのロングランを成し遂げたのは、常にアイデアを提供してくれ、僕の意向を信じて一緒に走ってくれた大橋巨泉のおかげと、ここで改めて感謝したい。

僕にとっての『11PM』は、ディレクターとして全ての情熱と信念を注ぎ込んだ番組であり、「11PMの前に11PMなく、11PMの後に11PMなし」の想いと感謝を当時の仲間たちに捧げ、皆へのレクイエムとしたい。



箱根芦ノ湖での筆者近影

写真提供

日本テレビ・読売テレビ